

て罪惡は一變じて純善となり、黒は變じて白となるなり。

爾曹もと暗かりしが、今主に在て光れり、光の子輩の如く行ふべし。蓋し、光の結ぶ所の果は、諸のよきこと、正しきこと、誠實の内にあればなり、主の結ぶ所を辨へて之れを行ふべし。なんぢが果を結ばざる暗行に與することなく、反て之を責べし、彼等が隱にて行ふ所の事は、之を言ふだも醜べき事なり。凡て責を受べきことは光に依て顯るゝなり、そはすべてを顯すものは、光なればなり。是故に云る言あり、寢たる者よ、目を醒して死より起よ、キリスト爾を照さん、(以弗所書八―十四)

妻なる者よ其夫に従ふべし、此は主にある者の爲すべき事なり、夫なる者よ其妻を愛すべし、苦を以て之を侍ふ勿れ、子たる者よ、爾曹すべての事に親に従ふべし、是主の悦び給ふ所なり、父なる者よ、爾曹の子を怒らすること勿れ、恐くは其氣餒ん、僕なるものよ、凡のこと肉體に

つける主人に従ふべし、人を悦ばする者の如く、唯だ眼前の事を務ることなく、誠心を以て神を畏れて従へ、汝等何事も、人に事るが如せず、主に事る如く、心より之を行ふべし、そは爾曹に、主より報賞なる嗣業を受ることをしる者なればなり、汝等主なるキリストに事ふべし、(哥

羅西書三ノ十八―二十四

夫すべての人に、救を賜ふ神に恩あらはれ、我儕を誠め、我儕をして神を敬はざる事と、世の中の慾をすて、自ら制し、正く度みて、今世にならへ望む所の福と大なる神、即ち我儕の救主イエスキリストの榮の顯れん事を望み待たしむ、キリスト我儕の爲に己の身を捨給へり、是我等を諸の罪より贖ひ出し、且己の爲に一民をさよめ、之をして熱心に善事を行はしめん爲なり、汝此等の事を以て語りまた勤め、爾の諸の權威を以て、戒むることをすべし、爾人に輕せらるゝ勿れ、(提多書二

ノ十一―十五)

信行の關係に就て、親鸞聖人と保羅と相違あること、以上引文を吟味することにより、よく知らるゝなり、而して信仰は、智愚賢不肖の差なく、老若男女の差なく、共に一味平等の他力信仰なるてふ事は、親鸞聖人も保羅も同一なり、親鸞聖人は「上法人然上人」の御信心も善信房の信心も一なり」と云ひ保羅は「主一信仰一バプテスマ一」と云ひり信仰は一なり不變なり」と云ふこと、豈に味ふべきことならずや。

四

贖罪と云ふ思想は、よしんば、其形式状態はことなるにもせよ、他力教には是非なかるべからざる必須要件なり、贖罪を除いたる他力は、生命なき空虚の理談なり、佛教他力教にありては、法藏菩薩の發願修行と云ふもの、まさにこれ贖罪の思想事實を明示せるもの、久遠實成の古佛、罪惡の衆生を救濟せんがため、果報の方便として、因位の菩薩になり下り、衆生のなすべき願行を、衆生にかはりてなしとげられたり、吾人は彌陀

正覺の大音響流の呼聲にさまされたるものなり、救はれたるものなり、されど其呼聲の依て起り來たる法藏菩薩の「難・作・能・作」の修行をきくときに、「假令身止諸苦毒中、我行精進、忍終不悔」の大勇猛心をきくときに、四十八願なるもの、「一誓願爲衆生故」をきくときに、そのきく度毎に今更の如く感ぜざるを得ず、心臓は爲に鼓動せざるを得ず、罪障の多きだけそれだけ慈悲の廣大无窮なるに感謝せざるを得ざるなり、而して衆生に代れる法藏菩薩の因位の修行、既に成就して盡十方无碍光如來とならせ玉ひ來れ」と呼びかけ玉ふ、信せよ、即坐に救はるべし、疑晴れよ、現生に正教聚の分人たるべしとは、親鸞聖人の宣言なり、使命なり。

然らば保羅の贖罪觀は如何なるものかと云ふに、ウエルハウセンは、最もよく之を説明せり、其言は、保羅特殊の事業は、天國の福音を變化して、耶蘇基督の福音と爲したりし事なり、福音は最早天國來るべしとの預言にあらずして、耶蘇基督既に來り、之を成就し玉へりとの事なりと

云へり。基督は我等の罪に代り十字架に釘打たれ、我等の罪を贖ひ死後復活して上天せられたり。基督によりて神を信せよ、基督に依て新なる人となりて神を信せよ、信することに依て永却の救済を得と云ふ之れ保羅の福音なり。

キリストイエス罪人を救はんために世にきたれり、信すべく亦疑はずしてうくべき話なり、罪人のうち我は首なり、提摩多前書一ノ十五、それ神は一位なり、又神と人との間に一位の中保あり、即ち人なるキリストイエスなり、かれ萬人に代り己を棄て贖となせり、時いたらば證すべし、提摩多前書二ノ五

久遠の佛、罪惡の衆生をあはれみ、法藏となりて衆生に代り願行をつとむと云ふものと、神の愛キリストを降して其罪を贖はしむと云ふものと、豈に似たらずや、されど佛教の佛と基督教の神とは、其性質に於て重要な差異あり、それは佛陀と衆生とは二者全然別離せるものならず、

佛陀は因位によりて佛陀となりたるなり、吾人も願行を修して佛陀となるべき性質あり、悟て佛陀となるも、迷て衆生となるも、因果の法則の然らしむる所にして、佛陀や菩薩の力にて此因果の法則を除外すること能はず、而して佛陀は如何に罪障重ければとて之を罰することなし、罪障重ければ重き程慈悲の情を加へ玉ふなり、諸佛大悲は苦者に於て慈悲は此事なり、嗚呼佛陀は底の知れざる純慈悲の覺者なり、然るに基督教の神は、人類とは永く離れたる超然別種の地位も有したるものなり、人類が修行に依て神になりたるものにもあらず、またなるべきものにもあらざるなり、苦樂賞罰みな神の意志の下に行はるゝなり、神は殺活自在、死生手になり、雖惡人は之を罰す。

上に在て權をもてる者に凡て人々服すべし、蓋神より出ざる權なく、凡そ有ところの權は神の立てたまふ所なればなり、是故權に悖ふ者は神の定めにそむくなり、そむくものは自ら其審判を受くべし、有司

は善行の畏に非ず、悪行の畏なり、爾權を畏ざること、をねがふか、唯だ善を行へ、然ば彼より褒を獲ん、彼は爾に益せん爲の神の僕なり、若し悪をなさば畏れよ、彼は徒に刃をとらず、神の僕たれば、悪を行ふものに恕を以て報ゆるものなり、(羅馬書十三ノ一―四)

若われら眞理を曉得せられし後、なほ放縱に罪を犯さば、罪を贖ふ犠牲また有ることなく、唯おそれて審判を待つこと、仇敵をやき滅さんとする、烈火の遺るなり、モーセの律法の廢る者もし、二三人の證あらば恤まるゝこと無しと知べし、況し神の子を蹂躪し、みづからきよめられし、契約の血を、尋常のものとなし、又恩を施す靈を侮る者の、受べき其罰の重きこと、幾何と意ふや、主いはく、仇を報るは我にあり、我報べし、又曰はく、主その民をさばかん、かくいへるものを、我儕は知る、活神の手に陥るは、畏るべきことなり、(希伯來書十ノ二六―二八)

仇をなし、報をなす、愛の神と、罪が重ければ、重き程慈悲の情のたかま

る佛とは、其性質に於て、似て非なる所ありと云はざるべけんや。

五

親鸞聖人と保羅との二師の性格を比較すれば、親鸞聖人は外見甚だ温厚の人なり、生角稜々人と相争ふの人にあらず、されど一旦意を決して進むや、斷として常人の爲し能はざる所のものをなして、憚らず、奇警の觀察常人の意表に出るものあり、肉食妻帯を斷行せるを以ても知るべく、一朝にして二十年來の恩師、慈鎮和尚に涙を流し、分れ難きに分れたる、以て知るべにあらずや、三願轉入と云ひ、善人猶ほ往生す、況や悪人おやと云ふ如き、何たる奇警の觀察ぞ、然も自ら常に非常の謙遜を以て世に處せられたり、愚禿親鸞と云ひ、悲禿沈沒於愛欲、廣海迷惑於名利、大山不喜入定、衆之數不快、近眞證之證、可耻可傷矣と云ひ、自ら恐なるもの罪あるものとして、謙遜し玉ひり、保羅は英風俊骨の人なり、剛毅邁往の人なり、之が容貌も行爲も言語も英雄的なり、熱血溢れ、自ら任するこ

と極めて厚し、此點に於ては親鸞聖人よりも日蓮上人に比すべき人なり。

彼等キリストの役者なるが、我は之にまさり、わがかくいふは狂ふ者の如し、われほねをりしこと、彼等より多く鞭たれしこと、彼等より夥しく獄に入れらるゝこと、多く死に遭ふこと、屢なり又われは五次ユダヤ人に四十に一を滅したる鞭を受け、三たび條にて撲れ、一たび石にて撃たれ、三たび破船にあひ、一晝夜海にあり、又屢旅路をへかつ河の難、盜賊の難、同族の難、異邦人の難、城裏の難、野の中の難、海中の難、偽の兄弟の中の難に遇ひ、また彼等にまさりてほねをりつかれ、屢ねぶらす、飢へ、渴きしば、食を絶ち、凍へ、裸なりしなり、此に言はざる外の事ありて、日々我に迫る、諸の教會の憂慮なり、誰か弱て我弱ざらんや、誰がつまづきて我が心熱せざらんや、(哥林多後書十一ノ二三—二八)

我儕キリストの使徒にて人に重せらるべしと雖、或は爾曹にも或は他人にも人に榮耀を求めず、乳その赤子を負ふ如く我儕なんぢらの中に在て柔和にせり、如此なんぢらを慕ひて、唯に神の福音のみならず己の生命をも爾曹に預ると喜べり、是故汝等は我が愛するものなればなり、兄弟よ爾曹われらの勞と苦をしる、爾曹のうち一人をも累はせざる爲に、夜中工を作て、神の福音を爾曹にのべつたへたり、我儕汝等信する者に對て、何等かり潔く義に缺ること無し、行へるを爾曹にも神も證をなす、(帖撒尼迦前書二ノ六一—七)

親鸞聖人の極めて謙遜なるに反して、保羅は、事業的、自任、道德的、自任の如何に深く高きかを見るに足る。

その傳道の状態に至ては、親鸞、保羅二師が大に類似せるものあり、親鸞聖人は在來諸宗の種々復雜なる儀式を廢し、保羅は猶太の割禮其他の儀式に重きをおかざりし、二師共に短刀直入信仰の救濟を宣傳せら

れたり又親鸞聖人は救義上に在ては四法の網格を立て三願三經三機三往生の組織を立る如き微細なる法門の判釋をなせり保羅は「ペテロ」ヨハネの我等見し所聞きし所云はざるを得すと云ふ言行録的説明以上立て一の神學を立てたり「羅馬書」や「加拉太書」や「哥林多前後書」をよむもの明に之を知るを得べし。

以上陳述せる所之を要するに親鸞聖人の他力教は佛教他力中の他力なり使徒保羅の他力教は基督教の他力教なり親鸞聖人の他力は絶對他力と云ふべくくんば保羅の他力は相對他力なり佛陀は絶對慈悲の覺者と云ふべく神は相對慈悲の方と云はざるべからず。

第四章 阿闍世王論

一、阿闍世王の年代

阿闍世王は二千四百年の古中印度の大國摩訶陀國毘婆娑羅王の子として生れ壯にして大逆提婆達多と志を合せ恩義海山も啗ならざりし父王を弑し又大聖釋尊をも殺害せんとせし暴王なりしかども悔悟の念漸く萌し一朝釋尊の深妙の説法に聞き眞摯高潔なる再生の宗教的大王となりし人なり摩訶迦葉を上首とせる五百阿羅漢第一回經典結集の際之を保護して其大業を完成せしめたる人なり第一祖摩訶迦葉第二祖阿難の外護者となり陰に陽に佛教弘通に力を盡したる人なり嗚呼彼の性行を研究し事業を研究することは佛教の生ける感化の如何なるものなるかを吾人に示すのみならず興味不明なる印度佛教史に一道の光明を興ふるものたらすんばあらざるなり阿闍世王を研

究する豈それ徒爾ならんや。

摩訶陀國王統を考ふるに、阿闍世王はシスナーガ朝に屬せり、**ヴキム**・**ヌ**・**ブラーナ**に依りて、シスナーガ朝の諸王の次第を尋ぬるに、(一)シスナーガ(二)カーカヴァルナ(三)クセマドハルマン(四)クシャットラウジヤス(五)ヴキムビサーラ(六)アチャトタシヤトル(七)ダルフハカ(八)ウダヤーシ(九)ナシデヴァルドハナ(十)マハーナンデン是なり、阿闍世王は即ち六代の王たるなり、**ヴァー**・**エ**・**ブラーナ**によるに、(一)シスナーガ在位四十年(二)シヤーカーカヴァルナ在位三十六年(三)クセマヴァルマン在位二十年(四)クシャットラウジヤス在位四十年(五)ヴキムビサーラ在位二十八年(六)アチャタータシヤトル在位二十五年(七)ハルシヤカ在位二十五年(八)ウダーイン在位三十三年(九)ナンデヴァルドハナ在位四十二年(十)マハーナンデン在位四十三年なり、之を要するに、シスナーガ王朝は三百六十二年相繼續せり、マハーヴァアンサ「デーバヴァンサ」にビキムビサーラ以下

下の諸王を列擧せるを見るに、上の二書とは相違する所多し、「**阿育王傳**」善見毘婆娑律に、また頻婆娑羅王以下の諸王を記載せり、されど甚だ難然として、シスナーガ王朝と難陀王朝と旃陀羅笈多の建設せし王朝を容易に區別し難し、吾人は今此處に於ては是等の問題を詳叙するの必要を見ず、唯だ阿闍世王はシスナーガ王朝六代の君主にして、毘婆娑羅王韋提希夫人の間の子なることを知るの要あるのみなり。

阿闍世王の年代を考察するに、徒に冥想觀念を尊とみて歴史を顧みざる印度なれば、その組織をなせる確實なる歴史記録なきは固より其處なり、今所々より材料を拾集して到達し得らるゝ點まで之を探らんかな、善見律毘婆娑二に曰く、爾時阿闍世王、王位に登ること八年にして佛涅槃すとあり、マハーバンサーに曰く、此王毘婆娑羅王在位五十二年、其三十七年に一子生る、阿闍世と名く、父を弑し自立す、在位三十二年、此王の後八年に佛世尊入滅すとあり、然らば即ち阿闍世王は、釋尊入滅前

八年にあたり即位せるを知るべきなり。釋尊入滅の年代これまた諸説紛々として一定するを得ず。されどその最も真に近く世上に用らるゝ説を求むるに、『衆聖點記』に依れば佛滅は紀元前四百八十五年なり。マクスミユレルに依れば紀元前四百七十七年なり。オルデンベルヒに依れば紀元前四百八十年なり。之を基本として阿闍世王即位の年代を推算すれば、『衆聖點記』に依れば紀元前四百七十八年の即位なるべく、マクスミユレルに基けば同四百七十年なるべく、オルデンベルヒに基けば同四百七十七年なるべし。之を要するに紀元前四百七十八年頃の即位と決定すべきなり。而して阿闍世即位の年こそ、即ち惡友提婆達多の教に従ひ無殘にも父王頻婆安羅王を弑し、摩訶陀宮城中時ならぬ大悲劇を演じ、佛教にも大影響を與へし日なりけれ。佛教徒たるもの豈此年の記憶するの要なからんや。然し此處に一の注意すべきは、『大涅槃經迦葉菩薩品』によれば阿闍世王の弑逆は佛滅三月前にありとなせり。其文に曰

193

く、善見父の喪するを見おはりて、正に悔心を生ず。雨行大臣又種々の惡邪の法を以てしかも爲に之を説く。大王一切の業行すべて皆罪あることなし。何故ぞ今悔心を生ずるやと。耆婆又まふさく、大王まさに知るべし。斯の如きの業は、羅二重をかさねたり。一には父王を害し、二には須陀洹を殺す。斯の如きの罪は、佛を除きて更によく除滅するものなけん。善見王のたまはく、如來は清淨にして穢濁あることなし。我等罪人如何か。見ることを得んと、善男子よ我此事を知るが故、阿難に告ぐ。三月を過ぎ終りて我れまさに涅槃すべしと。善見聞き終りて即ち成處に来る。我れ爲に法を説くに、重罪うすくなることを得て、無根の信を得」とあり。此文の善見王とは阿闍世のことなり。即ち彼は佛入涅槃三月前に大逆を犯せるなり。されど既に述べたる『善見律毘婆沙』によるも、『マハーバンサー』によるも、其他釋尊阿闍世教化後種々の國を巡回して説法せる事實に徴するも、涅槃經の佛滅三月前の年數は、斷して信用するを得ず。而して、

阿闍世王在位二十五年即ち紀元前四百五十四年(兼聖點記に基く)に、因果の數遂にまぬがれがたきにや、其子憍毘耶跋毘羅に弑せられ此世を逝きなき、王の在世中摩訶迦葉は鷄足山に入定して世に出でずなりしなり、阿難法を継ぎ教を傳へたるもこれまた恒河の一島にて涅槃に入りしなり。

阿闍世王は「マハーバンサー」によれば、毘婆娑羅王即位の三十六年に生れたれば、即ち紀元前四百九十四年に生れたるなり、毘婆娑羅王釋尊より少きこと五歳、阿闍世の父王を害せしは十六歳の時にして、此時釋尊七十三歳、毘婆娑羅王は六十九歳の時なりしなり、是に依て之をみれば阿闍世は毘婆娑羅王五十三歳の時生れたるを知るべし、かくて阿闍世は三十二年間王位にありたれば、其死や四十七歳の時なり、以上の推測に依て略々阿闍世の生死及起逆の年代を明白にするを得たり、若し謬れるあらば識者の教示を待つて之を正さんのみ。

二、阿闍世王の性行

我は思ふ、墮落の路は廣くして入り易く、始は愉快なれども漸く苦痛滋げきに至り、其極滅亡の深淵に達して止む、向上の路は狭くして入り難く、始は苦痛多しと雖、次第に安慰を加へ、遂に無窮の樂園に入る、而して墮落の中途苦痛多き所以は、迷者を鍛鍊修養して向上の一路に還すがため、の方便たり、若し人此方便によりて向上の一路に進まばよし、然らざれば滅亡の深淵に墜するのみ、阿闍世は墮落の中途、こよなき苦痛煩悶に鍛鍊せられ、萬死に一生を得、向上の大道に入りし、摸範を示せしもの、彼の性情行動吾人を教ふる、豈少々ならんや、乞ふ顯著なる彼の性行の一斑を觀察せしめよ。

頻婆娑羅王は最も深く釋尊に歸依し尊重供養することおろそかならざりき、王は、悉多太子求道の念禁し難く、竊に王城を脱し、路摩竭陀を過ぎるや、先づ之に面し、他日正覺を得んに法を受けんことを約せし人

なりしなり、又釋尊正等覺を成し波羅奈國鹿野苑の說法を終へ摩竭陀國杖林に来るや、先づ之を迎へて、法本無我三事生染の教義をきし人なり(佛說頻婆娑羅王經)以後王は釋尊に對する第一の歸依者供養者なりしなり、かくて王は六十九歳の時ゆくりなくも大擾亂は摩竭陀王城に起れり、そは釋尊嘗てコサンビーに往て法を説きしに人民の集るもの雲の如く其供養甚だ壯大をさはむ、されど一行中の提婆には誰ありて尊敬供養するものなかりき、提婆憤悲して思らく、若し親を以てせば佛と從弟たり、若し智德を以てせば敢て高弟に譲らず、然るに獨り我を疎外するは何ぞや、我大に決する所ありと、走せて摩阿陀に還り王城に阿闍世を訪ひ、種々の佞辯猾智を以て年少王子の歡心をとることをつとめ、遂に最後の毒焰を吐て云く、父王は王子の敵なり、王子代て新王となるべし、世尊は老耄せり、我れ代て新佛となるべし、新王新佛治化豈に樂しからずや、と、年少王子大に驚て曰く、尊者此語をなす勿れ、と、提婆此

處に於て王子に説かく、父王は王子に於て恩あるに非ず、父王始めて王子の生れんとせるや、相者王子を以て父王の將來に利あらずとせるがため、夫人をして百尺の高樓より地上に生みおとさしむ、幸に一指を損せるのみにして生命に別條あらざりき、父王は王子の敵なり、何の恩かこれあらんと、雨行大臣傍より其然るを保證せり、嗚呼年少王子遂に毒焰に酔へり、無明にくらまされたり、即ち奮然として父王を執へて牢獄に投じ、飲食を與へずして餓死せしめんことを計る、夫人韋提希我が夫の苦難を見るに忍びず、見舞に托して竊に飲食を送る、一日守門者此事を以て阿闍世に告ぐ、阿闍世火の如く憤ふり、母を執へ、劍を抜き、あはれ一撃の下其命を絶たんとせり、賢臣耆婆出で、之を止めしにより事なきを得たり、頻婆娑羅王は遂に牢屋に死しぬ、韋提希夫人は七重の深宮に幽閉せられぬ、嗚呼現在我を生みなせる大慈の父を殺し、大悲の母を幽せる阿闍世彼は果して鬼か蛇か、一片人心あるもの旃陀羅と雖豈之

をなすに忍びんや、況んや刹帝利の尊貴の位置におけるものおや、『佛説觀無量壽經』によれば、淨土門他力救済の實現は、韋提夫人七重の室に幽閉せられたるより起れるなり。阿闍世はまた提婆と志を合せ、大聖釋尊をも害せんとせしともありし、『法句譬喻經』によるに提婆阿闍世に説きす、め、摩訶陀國民をして佛僧に施與するを得ざらしむ、諸弟子諸方に散せしかども、猶ほ佛の傍に五百の羅漢あり、一日兩人計を設け、佛及び五百の羅漢を宮中に請召して供養せんとす、佛之を諾す、當日に至り佛及諸弟子安祥として宮城の前に進み來るや、提婆忽然宮城の大門をおしひらき、五百のあれくるふ醉象を驅逐し、佛及び諸弟子を一瞬間に蹂躙せしめんとせり、市城振動し、羅漢皆逃る、獨り佛と阿難威德儼然、醉象も之を害すること能はず、兩人の計水泡に歸したりしなり、かく提婆阿闍世の惡逆絶頂に到達せるや、摩竭陀の市民提婆を憎惡すると仇敵も嘗ならず、提婆市を托鉢するも嘗に之に食を與へざるのみならず、瓦石

を投じて之を逐ふに至れり、阿闍世は懊惱し始めたり、慚愧後悔の念に打たれたり、一日は一日より其煩悶は強く深く劇しくなれり、されど死せる父王は呼び返すべくもあらず、犯せる罪業は消滅せざるなり、彼は之が爲に病氣に墜りぬ、良心の呵責はいよゝつのりぬ、彼は此煩悶劇苦に堪へかね、遂に釋尊の下に求哀懺悔道を求むるに至りし、此間の状態を描けるものに、『大般涅槃經梵行品』、『長阿含第三分沙門果經』、『阿闍世王問五逆經』あり、『大般涅槃經』の記事と、『長阿含』の記事を對照すれば、そが骨子に於て大抵同一なるも、阿含は簡易質實にして實際に近し、『大涅槃經』は詩的熱情に富み沈痛激越の氣紙上に溢ふれたり、今二經の意を取りて之を述べんに、阿闍世の第一煩悶せる點は無罪の父王を殺害せること、これ未來惡報を招くにあらざらるかと云ふにありき、『阿闍世王問五逆經』によれば、之を提婆に問ひたりしに、彼言ひけらく、『大王恐懼を懷く勿れ、爲に何の殃かあらん、爲に何の答かあらん、誰か殃を爲して報を受け

ん、誰か殃を作て其の果を受くべき、然るに大王亦惡逆をなさず、惡を作す所のもの其報を受くべきのみ」と、『涅槃經』長阿含經』によれば、彼此懊惱に苦しめられ、富蘭那、未伽、荼拘舍離子、刪闍耶毗羅胝子、阿耆多翅舍婆、欽羅、迦羅鳩多迦旃延、尼乾陀菩提子等の如き當時の智者につき、之を尋ねたるに、或ものは善惡なるものは假に設けたるものなれば、決して善惡の報なしと云ひ、或ものは善惡の制裁は國民に及ぶべきも最上位の王には關係する所なしと云ひ、或ものは慚愧する故惡あり、若し慚愧せざれば何の惡かあらんと云ひ、皆王の無罪を説て其心を慰めんとせしかども、王は之に依て廓然として心胸をひらき、無醫の安慰を得る能はざりしなり、最後に阿闍世此疑を以て耆婆に質しぬ、耆婆曰く、善哉々々、王罪を作すと雖、心重悔を生じて慚愧を懷く、大王よ、諸佛世尊常に此言を説く、二の白法あり能く衆生を救ふ、一に慚二に愧なり」と、かくして耆婆は王に勧め、釋尊の所に詣ふで、罪を懺悔し、正法をさかしむ、見よ、罪惡

の不安を救ふものは決して財産地位にあらず、哲學的理論にあらず、中心より湧き出る懺悔と生ける正法の方により再生の人となるにあるのみ、而して阿闍世王は自己の不安を救ふもの、唯佛のみなることを知ると雖、嘗て佛に敵し、剩へ之を殺害せんとせし程のもの、今何の面目ありてか佛に救済を求めんと云ふ、耆婆佛の大慈悲をとき、漸く王を伴ひ佛所に至りぬ、王云く、唯願くは世尊、我が悔過を受けよ、我れ狂愚癡冥無識の爲に、我父王法を以て治化偏狂あるなきに、我巨欲に迷惑し、實に我父王を害せり、唯願くは世尊、加哀慈愍、我悔過を受け玉へ」と、釋尊爲に其罪を許して正法を説く、『涅槃經』によれば、釋尊正法二十事實相無相の眞理を説て王を開悟せしむ、王大に感に打たれ、恰も毒樹、荷蘭の種より香木、旃檀生じたる如しと喜びて曰く、我今佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依してまつる、我れ正法中に於て、優婆塞となるを聽し、玉へ、自今已後、盡形壽まで、不殺、不盜、不淫、不欺、不飲酒、唯だ願くは世尊、及び大衆明に、我

請を受け玉へよと、かくて佛教破滅の大敵は變じて外護の智識檀越となり、惡逆の暴王は變じて慈悲高德の明君となりしなり、正法歸依後の王を見よ、誠に瓦礫變じて黄金となりし感なくんばあらざるなり、増一阿含經三十二卷によるに、摩訶陀國の敵國毘舍利に疫癘大に行はる、毘舍利の人民之を妨ぐに道なく、衆口一致大聖釋尊の來化を乞ふに決しぬ、使者竊に摩訶陀國に入り釋尊に謁して來化を乞ふ、釋尊使者をして阿闍世王に許諾を乞はしめんと欲す、使者曰く、大王豈に之を許さんや、我を見ば頭をはねんのみと、釋尊強て之を乞はしむ、阿闍世王嘗に之を殺さざりしのみならず大に好遇して釋尊の化を廣く地方にしく喜び玉へりと、又法句譬喻經によるに、阿闍世敵國越祇國を伐たんと欲して利害を釋尊に問はしむ、釋尊戰爭を止めて治を正くし徳を修むるをすむ、後越祇國戰はずして王に心服せりと、蓋し阿闍世王の如きは、青年道を誤て墮落の淵に沈没し、煩悶懊惱をさはめ、此處に佛陀の慈光に

より宗教の眞義人生の立脚地に到達し、光明の天地に再生せりと云ふべきにあらずや。

我嘗て紀元三世紀に於ける印度の大王阿育の性行を研究せることありき、阿闍世の行爲は甚だ阿育に類似するを覺ふ、始め暴逆にして佛教に敵せるが如き、後熱心なる佛教外護者となりて、其弘通に力を盡せる如き、安全なる死を得ざりし如き、皆大に類似せるものなり、されど其性質に至ては二者異なるものなくんばあらざるなり、阿育王は剛烈雄悍爲さんと欲する所は爲さざれば止む能はざるなり、刀を抜けば無爲にして鞘に治め能はざる人なり、彼の雄大なる所以、此處にあり、彼の生涯の悶々たる所以、此處にあり、阿闍世王は英氣鬱勃たれども多感にして、深く物に感じ、又能く人の言を容れたりき、提婆雨行の毒言にも感じたりき、耆婆の至誠にも感じたりき、彼は人知れず内心深き處沈痛抑ゆべからざる煩悶を感じたりき、煩悶の子は遂に佛陀の光明により平安を

得たりけり、要するに阿闍世と阿育は、其生涯は二王大に似たる、あれども其性質は一は沈痛多感一は剛烈雄邁の人なるを覺ゆるなり、

三 佛教上阿闍世の効績

阿闍世の佛教上に於ける功績は決して少なからざるなり、『佛說觀無量壽經』によれば、淨土門他力救済は韋提希夫人によりて實現せられたりき、佛教の偉大なる感化力は阿闍世自身に依て立證せられたりき、阿闍世は佛教歸依後常に佛教に對する外護者供養者たりき、釋尊八十拘尸那伽羅城に入滅し玉ふや、王は寶塔を建て遺骨を供養怠たらざりき、又『善律毘婆娑』『マハーパンサー』に依れば第一佛典結集につき阿闍世の保護を記すること詳細をきはめぬ、其意をとりて之を述べんに、王舍城の頽壞せる十八大寺を補修し講堂を建立し、摩訶迦葉等五百の聖羅漢をして經典結集に就て何等の不便不足なからしめたりき、『佛統記』等に依て之を考ふるに、摩訶迦葉は鶴足山に入定して世に出でず、阿難法

を承けて之を傳ふるや、王は常に保護供養を怠たらざりき、一日王阿難に云く、予不幸にして佛の涅槃にも迦葉大徳の涅槃にも遇ふを得ず遺憾之に過ぐるものなし、願くは大徳涅槃の時我に告げよと、既にして阿難涅槃に臨み、王の守門者に其旨を告げて恒河の一島に去る、王守門者より之をき、急に駕を命じて恒河の岸上に赴き、遙に阿難の涅槃を合掌跪拜せりき、かれ王は佛教に對して大功績ありしのみならず、國威隆々覇を印度に唱へたりしなり、終りに一事の云ふべきあり、眞宗の親鸞聖人此摩竭陀宮城の騷亂を評すらく、然れば即ち淨邦縁熟して調達、閻世をして逆害を興せしめ、淨業機彰れて釋迦韋提をして安養を撰ばしめ、玉へりと、摩訶陀宮城の騷動を以て他力教發現の舞臺と見玉へり、これ誠に味ふべき宗教的説明にあらずや、然り、阿闍世の一生涯を研究するは、佛教者にとりて豈に偉大なる興趣と價值なしと云はんや、

第五章 韋提夫人

(前章と對照して摩訶陀)

婦人は男子より心狹隘なる故、隨て些少の事も苦痛の種となり、鬼や角心を煩すこと一方ならず、事にふれて感情つよき故、僅の刺激にも涙もろきなり、されば婦人の逆境に逢へるは如何にはげしく苦痛を感じ、懊惱を感じ、熱火に身を投じ、氷下に壓迫せらるるの思あるかを推察せざるべからざるなり、吾人は我淨土教の根源、誠によわき涙もろき一婦人の悲惨此上なき境遇に處し、宗教的安慰を求めたる結果としてあらはれ來り、罪あるもの障あるもの、愚なるもの、不才なるもの、俗界にありて煩惱に苦しめらるる人を救濟するに至りしことを喜ぶ。

阿闍世太子の騷動は、佛在世に於ける印度の一大事變なり、此事變は佛教にも深大の影響を及ぼすに至れり、今其事情を考察するに、釋迦佛の從弟にして且つ佛弟子たりし提婆達多是、釋迦佛の未だ悉多太子と

して王宮に居りし時より、凡の事につけ之と競争し之に敵意をはさみし人なり、悉多太子の耶諭陀羅を迎へんとするや之を妨げんとせし人なり、後佛弟子となりしも、猶ほ佛を凌がんとするの舉動をなせり、佛は種々に訓戒すれども其効なかりき、佛曾て憍賞彌に安居し給ふや、國民の來りて供養するもの雲のあつまる如し、上足の弟子また讚嘆供養を受けたれども提婆達多を顧るもの一人もなし、提婆心に忿恚して思へらく、我は王族の尊貴を有し佛の從弟なり、學行また決して舍利弗目連に譲るものにあらず、然るに我を顧るものなきは何ぞや、我豈にかかる傲慢不明なる盲目的地方に居るに忍びんやと、即ち佛邊を去りて王舍城に歸りたり、此時王舍城主頻婆沙羅の太子阿闍世其父と好からず、且つ佛教を信せざりければ、提婆之を奇貨おくべしとなして巧に阿闍世の歡心を得ることをつとめたり、始め提婆舍利弗に向て神通を學ばんことを求むるや、舍利弗其野心を看破して之に教へず、其餘の弟子皆然

り、最後に阿闍世の所に至り、之に語て曰く、汝は是れ我弟なり、我通を學ばんと欲す、願くば一々之を教へよ」と、阿闍世は提婆の野心を看破し能はざりし故、其甘言に欺かれて、自己の知る處のもの悉く之を教へたり、提婆神通を得、阿闍世の殿前に於て種々不可思議の神變を現じ、其の尊敬と供養を得たり、是より提婆と阿闍世と親密なる交際を結べり、既にして佛憍賞彌より歸り王舎城の竹園精舎によりて說法し給ふや、一日佛大衆に對して說法せるとき、提婆往て佛に乞ふて曰く、世尊、年老邁せり、宜く静閑の地にあり、天年を養ふべし、弟子并に法藏を盡く我に附屬せよ」と、此の如きもの三度佛提婆に對して云く、舍利弗、目連等の大法將にすら、我尙ほ佛法を付屬せず、况んや汝癡人おや」と、提婆此語をきき、毒箭の胸に入りたる如くにて、心に奸計をいだき、阿闍世太子の所に至る、阿闍世太子提婆の容貌平生に異なるものあるをみ、之に問て曰く、尊者、今日顔色憔悴、平生と同じからざるものあるは何ぞや、提婆答て云く、我今憔悴

するは正く太子のためなり、阿闍世敬問すらく、尊者、我がために何の心ありて、斯く憂慮せらるるや、提婆答て云く、太子知るや否や、世尊、老年にして耄せり、之を除て我自ら佛となるべし、殿下の父王亦衰老せり、之を除て太子自ら正位に坐し玉ふべし、新王新佛の治化、豈愉快ならずや」と、阿闍世之を聞て大に怒て云く、尊者、謹で此語をなす勿れ」と、提婆云く、太子、眠る勿れ、父王頻婆沙羅太子にとりて、全く恩徳なし、初太子を生まんとするとき、父王即ち夫人をして百尺樓上にありて、之を生ましめ、地に墮ちて死せんとを望めり、幸なる哉、小指を損せるのみにして、生命に別條なかりき、疑はしくば、乞ふ小指をみよ」と、阿闍世此處に於て意や、動き、果して然るや」と、提婆云く、誰れか豈に虚言を以て太子を瞞せん、是れ皆な實事なり」と、此處に於て二人志を合せ、提婆は三度佛を殺さんとして、果さず、阿闍世は父王を弑し、母后を深宮に幽閉するの大悲劇を演ずるに至れり。

上來陳述し來れる如く、阿闍世太子は提婆の教唆により、一は生時の怨を報んがため、一は王位を貪欲するの惡心より、父王頻婆沙羅を執へ七重の室内に幽閉し、諸群臣を制して一人も往くことを得ざらしむ、然も飲食を送らず、之を餓死せしめんとせり、王妃韋提希夫人と云ふあり、常に王に使へて貞淑なり、されば此度の出來事に就ては、中心深く之を憂慮し、如何にもして王を救はんと欲する心より、身體を清め、酥蜜を麩に和し、之を其身に塗り、其上に衣服を着して之を隠し、亦頭上に頂ける瓔珞の中に、蒲桃の漿をもち、以て王を幽室に見舞ひ、竊に蜜と漿を王に進む、其慘憺たる苦心、誠に云ふべからざるものあり、王は元來釋迦佛に深く歸依して法味を樂みし人、今此悲痛の境遇に處しては、現世の富貴顯榮のいよたのむに足らざるを感し、また怨恨不平の愚なるを悟り、たゞたのむ所は宗教上の安慰を得るにあるを知れば、毎日夫人のもたらし、所の麩を食し、漿をのみ、水を求めて口をそそぎ、口をそそぎ終れ

ば、佛の在せし耆闍崛山の方に向ひ、遙に佛を禮拜して此言をなせり、「大目犍連はこれ我が親友なり、願くは慈悲を起して我に八戒を授けよ」と、時に目犍連鷹隼の飛ぶが如く、王の所に至りて八戒を授く、日々此の如し、佛また尊者富婁那を遣して王のため法を説かしむ、王は麩蜜を食し、また法をきくことを得、身體すこやかに心やすく、顔色和悅を帶ぶ、かくして三七日を経たり。

一日阿闍世守門者に問ふて曰く、「父王猶ほ存在せるや、守門者答て曰く、「大夫人身に麩蜜を塗り、瓔珞に漿を塗り、以て王にすすむ、沙門目連及富婁那空より來て、王の爲に法を説く、我力禁制する能はず」と、阿闍世此語を聞き、怒ると烈火の如く、其母を叱して曰く、「我母はこれ賊なり、賊と伴なればなり、沙門は惡人幻惑の呪術を以て惡王をして多日死せざらむ、利劍をとりて其母を殺害せんとせり、一大臣あり月光と云ふ、聰明にして多智なり、阿闍世の此暴逆をみるに忍びず、耆婆大臣と共に進て禮

をなし王に申して云く、臣下の聞く所によれば、毘陀論經中に建國以來
 惡王あり、國位を食るか故、其父を殺害せるもの一萬八千人ありと云ふ
 されど未だ一人として无道に其母を殺害せる者あるをきかず、王今此
 殺逆の事をなさば、尊き刹利種を汚し、栴陀羅に墮するものなり、臣等之
 を見聞するに恐びず、暫時も此處に止るべからずといひて、手を以て王
 の劍を掟へ、卻行して退く、阿闍世大に驚き恐れ、耆婆に告て云く、汝我を
 助けざるか、耆婆王に申して云く、慎て母后を害すること勿れ、然らざれ
 ば我止まる能はずと、阿闍世此語を聞き、懺悔して救を求む、即ち劍をす
 てて母を殺害せず、内官に救し、韋提夫人を深宮に閉置して外出するこ
 とを得ざらしめたり。

韋提希夫人は深宮に幽閉せられ、夫類婆娑羅王の身の上を思ふにつ
 け、我身の上を思ふにつけ、一として涙の種ならざるなく、現存なせる我
 子のために、かかる悲惨の境遇に沈むことを思ひ來れば、いとと小さき

胸もはりさけ、熱せる頭はやぶれんとするの感ありて、憂愁憔悴また此
 世の人とも覺えざる程になれり、力にせる我夫も頼むに足らず、官侍從
 頼むに足らず、尊榮富貴頼むに足らず、我を助くべき子は却て我れの仇
 となれり、此處に至てたのむべきもの力にすべきものは、ひとり大悲矜
 哀の佛世尊あるのみ、即ち遙に耆闍崛山に向て佛に禮をなして云く、世
 尊は往時恒に阿難を遣して我を慰問し、玉へり、我今ま深く愁憂に沈め
 り、世尊は威重くして見たてまつるに由なし、願くは目連阿難の二尊者
 を遣して、我かために相見ることを得せしめ、玉へと語り終て、涙雨の如
 く下り、未だ頭をあげざるに、佛耆闍崛山にましまして、闍提希の所念を
 知り、即ち目連阿難の二尊者と共に空より王宮にあらはれ、玉ふ、韋提希
 禮しをはりて頭をあぐれば、世尊は神聖なる威容を以て阿難目連を左
 右にして目前に立ち、玉ふをみ、自ら瓔珞をとりすて、身を地に投して號
 泣して佛に申さく、世尊我れ昔し何の罪ありてか、此惡事を生する、また

何等の因縁ありて提婆達多と眷族たる唯願くは世尊我がためにも廣く
 憂惱なき處を説き玉へ我れまことに往生せん閻浮提濁惡世をねかはす
 此濁惡處は地獄餓鬼畜生盈滿して不善多し願くは我れ未來に惡聲を
 さかす惡人をみざらんことを今世尊に向て五體を地に投して求哀懺
 悔す唯た願くは佛我に清淨業處を觀することとを教へ玉へと佛此處に
 於て眉間より大光明を放て十方无量の諸佛世界を現はし示し玉ふ韋
 提夫人これら諸佛世界を觀して其の中より極樂世界の阿彌陀佛の所
 に生れんことをねがひ之を觀する道を佛に乞ふ佛爲めに十六觀法を
 説き具さに依正二報を觀して淨上に往生する道を教へ玉ふ然も皆こ
 れ爲未來世一切衆生と云ふ韋提希夫人は即ちこれ未來世一切衆生の
 代生者となれるなり
 嗚呼心のよわき一女性涙にもろき一婦人然かも慘愴悲痛の逆境に
 立ちし其人未來世の罪になやめるもの禍に苦めるものを代表して他

力大道によりて救濟さるることを示す唐の善導大師は韋提を評して
 「實業凡夫」と云ふげに韋提は心よはき苦になやめる凡夫なり親鸞聖人
 は韋提を評して「權化聖者」と云ふ然り韋提は凡夫往生の標準を示すこ
 れ豈權化聖者たらすや韋提の心の狹隘なるは多くの狹隘の人を導な
 り其涙にもろきは多くの多感の人を導くなり其逆境にあるは多くの
 逆境の人を導くなり其女性なるは女性の人を導くものなり吾人は淨
 土教の實機韋提夫人によりて代表せられたることを喜ぶ

第六章 信仰行程に於ける三譬喩

(長者窮子、水火二河及び「セーピルグリムス、プロケレス」)

信仰は内心實驗の告白なり。若し夫れ實驗なきの人之を聞て迷信にあらずんば空想となす。蓋し止むを得ざるの事となす。琉球人に向て北海道の氷雪を語るも之を信せざるの類か。吾人嘗て『法華經』信解品を讀み、其結構の美、文字の優麗に打たれき、されど其意義に對して尋常茶話底以上重きを置かざりしなり。亦支那善導大師の『散善義』を讀んで、二河譬喩に至り、能く求道精進の事實を形容し得たりと思惟しき、されど其譬喩の非實際荒唐なるを惜みしなり。亦英國のバンヤンの『ピルグリムス、プロケレス』を讀み、能く信仰過程を人格化して説示し得たりと感しき。されど實世界に遠き迂濶なるものなりとの思想なきにあらずしなり。吾人は等の三書に對し、琉球人の北海の氷雪を聞く如くならさ

るも、我事に直接ならざる他人の財寶を見るが如かりしなり。實驗は物を見るの眼目なり。物を把握するの手なり。目的地に至る足なり。信仰の内的經驗は、吾人をして先きに荒唐迂濶と感せしめたるものを一變して、點々地、活潑々地の靈的事實とならしめたり。他人の財寶にあらずして我財寶なるを悟らしめたり。『法華經』信解品に於ける長者の一子、偶然の機會より、我家を棄て、他國に流浪乞食せること五十年、流浪のはて、一日ゆくりなくも故郷にさまよひ來り、我生家とも知らず、我家の内部の狀況をみるに、尊嚴なる一人、師子の床に踞して寶に足を承たり。諸の婆羅門刹利居士皆恭敬圍繞して、眞瓔珞の價直千萬なるを以て其身を莊嚴せり。吏民僮僕は手に白拂を執て左右に侍立せり。覆ふに寶帳を以てし、諸の華旛を垂れたり。香水を地に灑き、衆名華を散せり。是の如き等の種々の嚴飾ありて、威德特尊なりき。窮子の所感果して如何なりしぞ。竊に是念を作さく、或はこれ王か、或はこれ王の等か、我れ

力備して物を得べきの處にあらず。貧里に往至して力を肆にする地あり。衣食得易からんには如かず。是れ獨り窮子の威のみにあざるべし。我れ始て佛教を學び、其目的佛陀たるにありを聞きぬ。佛陀とは何ぞや。富貴名譽の地位を得るを云ふにあらず。學者たるを云ふにあらず。道德者たるを云ふにあらず。政治家を云ふにあらず。文學者を云ふにあらず。長壽健康者を云ふにあらず。彼は无量壽なりと云ふ。彼は无量光なりと云ふ。絶待の智慧なり。慈悲なりと云ふ。利他の救主なりと云ふ。三界の大導師なりと云ふ。遍一切所なりと云ふ。其言や美にして大なり。其語や淨にして壯なり。されど此の如きは、茫漠雲烟を握むにも似て、更に我身と直接の關係なき心地せらるるならずや。うるはしき空想として、樂しむはよからんなれども、現實界には没交渉ならずや。如かず。入ては書を讀み出ては、職業をつとめ、智を増し、徳を高ふし、平安健全なる一生涯を送らむには、どかゝる考慮は獨り吾人のみにあざるべし。されど試に

思へよ。種々の嚴飾ありて、威徳特尊なる。入我れ力備して物を得べき處にあらず。とせる處、到底永却近くべからず。とせる所は、豈に計らんや。我親愛なる父我生れたる家なりしことを、佛陀は雲烟漂渺裡に求むべきにあらず。して、我自已中に求むべきことを、佛陀は空中の樓閣にあらず。して、現實界に建設せらるべきことを、迷悟は心機一轉の間にあり。佛凡は表裏一紙の差なり。斯く觀し來れば、窮子は他人にあらず。我なりしなり。然し乍ら窮子は其父の慈悲方便により、傭人となりて、善き待遇を受けながら猶ほ長く猶ほ自ら客作の賤人と謂へり。其父最後に臨み親戚故舊を集め、親子の名のりをなして、其全財産を附屬するや、窮子思らく、「我れ本と心に希求する所あることなかりき。今此寶藏自然にして至れり」と思ふ。我等長く佛陀於哀無限の慈教に接しなから、猶ほヨソくしき。の感なきにあざりしも、一度佛陀の心光と靈的同化するに及んで、寶藏自然に至て、我れこれ佛子たりしなり。這般の旨趣、これ豈法華經に

の死葛藤ならんや。

善導の水火二河の譬喩を見よ。人ありて百千里の道を旅行して、無人空迥の澤に至る。忽然後を顧みれば、群賊惡獸ありて襲ふて我を害せんとするあり。前に進みてのがれんと欲すれば、驚くべし。にはかに水火の二河の横はるをみる。右には火河炎々として紅波迸り、左には激浪空をひたして足の向くべきなし。唯た見る、中間四五寸の白道。幽かに存して我は通過し得られんも知るべからざるなり。此處に於てか、旅人念言すらく、止るも死せん、後に歸るも死せん、進むも或は死せん、されど乞ふ進まん哉。と。此時西岸上に聲ありて呼ぶをきく。汝一心正念に直に來れ、我れ能く汝を護らん。すべて水火の難に隨するを恐れざれ。と。然り、我等道を求め、向上の一路をたどりて進むや、そが發心の時、意氣天を衝かんばかり、勇健なりしも、年月數々めぐり去れども、元來の光明未だ認むるを得ず。世間の快樂には離れて、未だ出世間の法樂を得ず。脚疲れ意衰るへ

寂寥空迥の感、豈に肺肝に貫くなからんや。此時翻て世間の状態を回顧せよ。或人は求道の愚を嘲て、功利の道をすいめん。或人は權勢富貴の道をすいめん。種々の學説をすいめん。これ誠に無人空迥の澤に於ける群賊惡獸にあらずして、何ぞや。されど功名富貴の中心の煩悶を救ふの道には、あらざるなり。種々の學説、身心脱落の妙境界に導くものにあらざるなり。いでや心細しと雖、向上の一路をたどらん。此時眼をあげて、前途を望めば、忽然として自己心中に横はる二河を見る。一は名利富貴に愛着せんと欲する念なり。一は苦痛困難の逆境を、蚊の如く忌みきらう念なり。求道者若し勢するどき、此二河に避易せんか。これ最早墮落の故家に還るものなり。群賊惡獸は外界の敵なり。水火二河は内界の敵なり。一見外界の敵甚だ恐るべしと雖、内界の敵の根づよく去り難きの大に惡るべきに如かざるなり。死を決して内外の敵に對して進まんと決心せんか。これ誠に元來の靈覺に接する時なり。身を棄て、靈に生くるの時。

なり。如來の一心に直來の聲をきく時なり。斯くて旅人は安全に四五寸の白道を渡りて彼岸に到達し、善友と會して無限の歡喜を得たり。また如來の靈音に接して平安昌平の无窮を別天地に樂むを得たり。知らずや、世には今も猶ほ群賊惡獸空迫の澤にはびこり、水火の二河四五寸の白道を挟んで荒れすさみつゝあるを。

『ベルグリムス・ブログレツス』の一卷、これ善導大師の二河喩の一層詳細にせるものと云ふを得べけん。聖書を讀んで背に重荷のかゝれるを感し、天火降りて我が都市を燒盡せんことを知れる一クリスチャン此苦患を脱せんがため、妻子の諫止をよそにして常樂世界シオンを目的に旅行につけり。途中種々の誘惑と危險に遭遇して道を誤り、死に就かんとせること屢々なりき。或時はウオルドリーワイズマン出て来て曰く、「凡て心の弱き人は、自己分限不相應の高尙の理義に思を苦しめ、心氣錯亂するもの少なからず。斯くの如く足下も心氣錯亂せる一人にして、

有るか無きか已定らぬ物を得んとて、身の行末も考へず、迷に乗して出て來るは甚た不可なり」とたしなめられ、或時は途中小亭に睡りて貴重物の巻物を失ひ懊惱をきはめ、或はヒエミレーシヨン・バレーにアポリオンと惡闘し、數個所の重傷により彼に組みふせられ、殆んど一命を失はんとせし如き、或時はジアイアント・デスペーアにとらはれてダウブ・テングカツスルに投せられ、虐待を受けたる如き、其他不可言の辛苦艱難誘惑障礙を排して、遂にシオンに達し、黄金の輝ける衣をつけ榮の標證なる冠をいたゞき、玉琴を以て主を讚美するに至れりと。『ベルグリムス・ブロレス』の一卷、讀んで我身に思ひあたる所なき人は、此人はこれ一闡提の徒、永く宗教に入るの資格なきものなり。ジョン・バンヤンの沈痛なる信仰の經過は此人を驅りて此千載を照すの大文字をなさしめぬ。彼は此書によりて信仰の障礙たるべきものは、(一)妻子、(二)浮世の幸福、(三)形式偽善、(四)寂寥、(五)疑惑、(六)浮世の浮沈にして、信仰の援助となるものは、

(一)經典、(二)傳道士、(三)道友、(四)確乎精進なることを示したり、我等豈鑑みるものなしと云はんや。

吾人は求道の友が此三書を體讀して自己信仰の經過に照さば、其得る所のもの少なからざらんを信するなり。されど此處に一の語るべきあり。昔時東嶺和尙重患に接し、また此世の人にあらざらんとす。即ち病床筆を走らして安立の大道を論じ、一書をなす。後幸に全治して壯康舊の如くなるを得、一日火炎中に此書を投じて曰く、活人現在、何要此死葛藤と諸兄にして若し活人現在、何んぞ此死書を要せんと云はんか。我れまた何をか云はん。誠にかくあらんを望むのみ。

第七章 日本文學上に現はれる他力教の

思想

佛教の我國に入りしは早く繼體天皇の御代なれども、佛教と儒學と全く相混じて我國思想海の調和をなさんとせしは奈良朝時代なりとす。然れども多くは假名を以て我國古朴素の情を修飾構想することなく、歌ひしもの書きしものいみなりしが、平安朝に至りては漸く變遷して我邦文學上にも大に佛教思想の配味せられたるを見る。即ち叙事のうち凄愴なる風を帯び綺麗なる中に無量の意を含めたり。

今之等のうち特に他力思想に關する文學を調べんと欲す。抑々他力でふ思想たるや何れの宗教かあらざらん。何となれば宗教の至極人類救済の本義必らずや茲に到らざるべからざればなり。而して箇人信仰の經歷に幾多の發展階級あるが如く、時代全般の心靈的趣向にも亦多

少同種の事なかるべからず、否先聖後聖若くは古人、今民其住する所の心念には一點の相違なかるべきも、其時代精神文明の進退に關して之が説相亦變遷せざるを得ず。

佛教渡來當初の聖者聖德太子十七憲法第二條に云く。

篤く三寶を敬へ、三寶は佛法僧なり、即ち四生の修福萬國の極宗なり、何れの世何れの人か此法を貴ばざらん、三寶に歸せずんば何をもて枉れるものを直さむ。

又奈良朝に於て行基良辨の二高僧聖武帝をして近江信術等の京の甲賀なる盧舍那金銅像を建創せしむ、時の詔勅の中に宣く、

過去現在未來を通じ、皆此福德に資て彼岸に到り、淨土に遊ばん事を希ふ。

されは未だ文學として見るべからざるも、廟堂にありて佛教的術語を用ひ而も淨土の字、三寶の文あるは聊か以て見るに足らんか。

進みて平安文學に於ては先づ預め思ふべきは源氏物語等は上流文學として社會一隅の意向に過ぎざれども、拾遺物語の如き浮華上流の嫌なく、史上の逸話荒唐の巷話に至るまであらゆる口碑を當時の鄙語もて記述したるものなれば、以て如何に一般民間に這箇の思想ありしやを悟るべきこと是なり、今一二を例せん。

源氏物語の一節

大將の君は中略故母息所の御兄の律師の籠り給へる坊にて、法文など讀み行ひせんと覺して、二三日おはするに哀なる事多かり、中略律師のいと尊き聲にて念佛衆生攝取不捨とうち述べて行ひ給へつるがいと美しければ云云。

又云くはるか西の十萬億の國へたてたる九品のうへの望みは疑なく傳ぬべければ、今はたい迎ふる蓮をまち侍る程ぞ、その夕まで水草きよき山の末までつとめ侍らんとてなんまつり入りぬ。

榮花物語の一節 (道長薨去に際し院源の說法中)

尊靈かの西方世界に生れ給ひなば、樂をうけ給はんとし極もなく天
 けふしてあひ見ることをえ給ふ、又かぎりなき樂しみを得玉ふべし、
 かるがゆるるに此世界につゆも心とまらず、佛の御をしへのごとくに
 て最後の御念佛みださせ玉はざりつたのもしきかな、今は極樂の上
 品上生の御位と頼み奉るなどいみじうあはれにかなし。

又云、佛を見たてまつれば、丈六の彌陀如來光明第一義なり、もろく
 の御頭は縁の色ふかう眉間の光毫は右にめぐりて宛轉せると五須
 彌のごとし、中略、實には寂滅にしてたい名のみなり、この故に正に知
 るべし、初觀の衆生はすなはちこれ三身即一の身なり、諸佛等又相好
 光明なり、萬德圓滿相好光明なり、色即是空なるが故にこれを眞如
 實相といふ、空即是色なるが故に、相好光明といふ、一色一香中道にあ
 らすといふことなし、受想行識も亦復かくの如し、即三常彌陀佛の眞

徳ももとより此比丘僧にして、たいむげなり、上の端に觀音勢至お
 なじく金色にして玉の瓔珞をたれてたゞせ給へり、一佛の御よそひ
 かくのごとし等。
 一見すれば十九廿の本願に相應するがごときも、其府を叩くに云ふ
 べからざる幽意の存するあり。

宇治拾遺物語の一節 (尼地藏を見奉る事)

今は昔丹波國に老いたる尼ありけり、地藏菩薩は曉ごとによりき給
 ふことを仄に聞きて、曉ごとに地藏見たてまつらんとてひとよかひ
 惑ひありくに、博打のうちばうけて居たるが見て、尼公は寒きに何事
 をし給ふぞといへば、地藏菩薩の曉にありき玉ふなるに逢ひ參らせ
 むとてかくありくなりといへば、地藏のありかせ玉ふ道は吾こそ知
 りたれ、いざ給へ逢はせ參らせむといへば、あはれうれしきことかな、
 地藏のありかせ給はん所へ我を率ておはせよといへば、我に物を得

させ玉へやがて率て奉らんといひければ、この着たる衣奉らんといひければ、いざ給へとして隣なる所へ率ひて行く、尼悦びて急ぎて行くに、其所の子にちぞうといふ童ありけるを、それが親を知りけるによりてちぞうはと問ひければ、親あそびといぬ、今來なんといへば、くはこゝなり地藏のおはします所は、といへば、尼うれしくて細の衣を脱ぎて取らすれば、博打は急ぎて取りていぬ、尼は地藏見參らせんとて居たれば、親ともは心得ず、などこの童を見んと思ふらむと思ふほどに、十ばかりなる童の來たるをくはちぞうといへば、尼見るまゝに是非をも知らず伏し轉びて拜み入りて、上にうつぶしたり、童すはへを持ちて遊びけるまゝに來たりけるが、その楚して手すさびのやうに額より顔の上までさけぬさけたるなかより之もいはすめでたき地藏の顔見え給ふ、數た拜み入りて打ち見上げたれば、かくて立ち玉へれば、涙を流がして拜み入り參らせて、やがて極樂へ參りにけり、され

ば心にもだにも深く念じつれば、佛も見え玉ふなりけりと信ずべし。前二者に比して、文平易に而も、うつくしく、純他力的の意義を含めるを見る、觀經の諸佛如來是法界身入一切心想中の文思ひやられてありかたし。

此他傳教、空海、管公、源信等の譯記譯文、今様等、徵證すべきものありといへども、今は省きつ。

次に鎌倉室町時代の文書の一二を揭示せば、左の如し。

源平盛衰記の一節

抑淨土十方に構へ諸佛三世に出て給へとも、罪敗不善の凡夫入ること實に難し、彌陀の本願念佛の一行はかりこそ、貴く侍れ、土を九品に分て破戒闍提嫌之事なく、行を六字につめて、愚痴暗鈍も唱ふるに便あり、一念十念も正業となり、十惡五逆も廻心すれば、往生と見えたり、念々稱名常懺悔と宣ひて、念々ごとに御名稱すれば、無始の罪障の

悉く懺悔せられ一聲稱念罪皆除と稱して一聲も彌陀を唱れば過現の罪皆のぞかるゆゑに南無阿彌陀佛と申す一念の間に、よく八十億劫の生死の罪を滅す、憑ても憑むべきは五劫思惟の本願念じても念すべきは此彌陀の名也、行住座臥を嫌はねば、必可願成迎是を他力の本願と名付く、又は頓教一乘といふ、淨土の法門彌陀の願巧肝要如此、又俊寛僧都鬼界が島の最後の一節に、

されば今は一筋に、今生を穢土の終と思召切て、當來には必らず淨土へ參らむと心強く願ひ御座すべし、中略など種々教訓申しければ、僧都息の下に、中略されば肝心をくだきても骨肉を捨て、いも求むべきは菩提薩埵の行、血髓を屠り、身體を抛ちても望むべきは安養淨土の境也、中略、毎日に法華經一部を暗誦してよもすがら彌陀念佛を唱へて一筋に後世の爲と廻向して、今に怠たらず云云

之等は頗る朝題目夕念佛の叡山風に似たり、又純盛入水の一節、

未○來○の○昇○沈○は○最○後○の○一○念○に○よ○る○と○聞○け○ば○一○心○に○念○佛○申○し○て○九○品○の○蓮○臺○に○生○れ○ん○と、中略、時頼入道涙をおし拭て、中略、中にも彌陀如來は十惡五逆をも嫌はず一念十念おも導き給はんと云、悲願御座す、彼願力を憑まん人疑はあるべき云云。

平家物語の一節 (平の字老の臨終を述ぶ)

彌陀如來は五こうが間思惟して起し難き願を發しましたすに、いかなる我等なれば億々萬劫が間生死に輪廻して寶の山に入りて手を空しくせん事怨の中の怨、中略、忽ちに妄念を翻し西に向ひ手を合せ高聲念佛したふ所に云云。

保元物語、義朝父を殺す一節に

鎌田次郎太刀を抜きて後へ廻りたるが、相傳の主の首を斬らんと心憂くて涙にくれて太刀の當り所も覺えねば持ちたる太刀を人に與ふ、其時願諸同法者臨終正念佛見彌陀來迎往生安樂國と唱へて終に

斬られ給ひにけり。

十訓抄の一節

十萬億の國々は海上隔て、遠けれど心の道の直ければつとめてい
たるところそきけ。

以上の例にて考ふるに、多くは武人最後の形容なり蓋し之れ當時武
門漸く盛に天下大に亂れて文筆の事緇林の間に潜伏して氣息淹々た
いその命脈を繋ぎしのみ而して生別死別をかね水酒盛に妻子を辭し
て戰場に向ふに當りては三軍を叱咤する丈夫といへども豈情緒纏綿
たるなきを得んや豈多少の煩悶するなきを得んやされば兵馬倥傯の
間に處するの武士が修行迂遠なる聖道門を棄て、易行他力に歸せし
こと敢て亦怪しむに足らざるべし特に況んや我邦他力の教義は當時
既に大成し親鸞上人蓮如上人等によりて盛大なりしに於ておや
さるに世は漸く江戸時代に遷り、佛教亦隨て衰へ、獨り日眞の諸宗が

民間に命脈を保ちしのみなるが、儒者鴻學等彬彬として飛出し敬神と
稱し排佛教と唱へ、銳利の鋒を向けられたれば、一般文學の上にも下層文學
を除きては、此程の思想復た見るべからずなりぬ、たゞ一二の例を拾は
ば左の如きものあるのみ。

八犬傳の一節

その折にこそ又舊の妻と思ふて、朝夕に只一徧の唱名もおん身の廻
向を受侍らば、道德智識の十念にも萬卷千寫の讀經にも優て成佛し
はべらん、今より久しきことながらおん身の齡百歳の後を待みて、臺
なす蓮華を釐て俟んのみ、さらばとばかり告別聲は涙に結隠る云云。
馬琴は、儒道を以て本としたれば、にや佛法に關せしものはあれども
他力思想につきては餘りに不足なるを感ず、次に、

唐物語の一節

まかじ唯心を一にして三界を厭ひて九品を願ふべし、極樂を願ふと

も此世に執を留めば纒を解かず去て船を出さむがごとし、此世を厭ひ極樂をも願はば苦を集めたる海を渡りて樂を極めたる國に到らんことは疑ふべからず。

海道記の一節

十方佛土に又ふたつなき一乗妙法に生れあひて十惡をつとまず引接をたれ給ふ、阿彌陀佛を佛し奉るは口のあればたゞとなぬたるが、耳のあればたゞに聞るたるがあさましのやすさや。

膝栗毛の一節

わがとう「お十念くトいふと、のり物をおろすわがとうか、此戸を引きあくれは、和尙はもてだこの如き赤ら顔にて、大あはた、ひげだらけのてつくり和尙さもしつべらしく、
「なむあみみなく」なむあみ 和「なむあみ 昔」なむあみ 和尙なむあみと段々と
たはづみへら鼻のなが 和尙「ハアくつまやみ ト云ふ皆十念の後手トれも 昔「ハアくつ
がむづくとして 口まねするごとく心得て」
まやみ 和尙「くそをくらへ 昔くそをくらへ 糞ハ、、、とんだ
お十念だアノ和尙はくつまやみから長郎だハ、、、こら中、なア

まアだアとさいめて立行過る源次郎北とさいめて立行過る源次郎北八はおひしくあとな見送り十念を申しながらのくつさめは
あつたら口に風をひかせし。

嗚呼王政維新の丕業は果されぬ、科學機械の輸入は駭々として歩武を進め今や却つて發明する所繁からむとす、近來我國文學上に於て果して何物が青年の好讀本なるや、人情の弦線に觸れ心機を鼓動せしむるは小説詩歌に若かざらむか、吾人眼孔の小なる不幸未だ佛陀大悲の鼓吹若くは他力趣味の發現を多く見ず、唯少許の基教臭味を帯びたるものあるを見るのみ佛徒たるもの勉めざるべけんや。(本文は村手愛岳君の起草なり)

第八章 薄伽梵歌の他力宗教

一、印度思想の統合は薄伽梵歌なり

薄伽梵歌の他力宗教を論明せんとするにあたり先づ薄伽梵歌の何たるを知らざるべからず、『バガヴト・ギータ』譯して『神歌』と云ふ、ウイルソンの説に従へば此歌の成りたるは西暦紀元一世紀の頃ならんと云ふ、マクスミユラの説に従へば此歌の作者は、ヴィヤサならんと云ふ、固より共に確乎たる斷案にはあらざるなり、今日一般に印度學者のとり所は此歌は蓋し紀元二三世紀の間になれるならんと云ふ、印度に二大叙事詩あり、一を『ラーマヤナ』と云ひ一を『マハーバラタ』と云ふ、『ラーマヤナ』は七卷に分れ二萬四千句より成り、『マハーバラタ』は十八卷に分れ二十二句より成れり、『薄伽梵歌』は此『マハーバラタ』の中の一部として存せり、されど『薄伽梵歌』は本來『マハーバラタ』の一節にあらずして後世の「エ

ピンド」なることは印度學者の皆許す所なり、パンヅー王の五皇子父王死して其兄ダリトラストラの家に養育せらるゝダリトラストラの長子ツルヤダナ悪性にして次子クナ僕サクニと相計りパンヅーの領土を奪掠せんことをたくらむ、一日パンヅーの第一子ツルヤダナの僕シャクニと博奕をなし其國を失ふの不幸を惹き起しぬ、五皇子已むを得ずして叔父の家を出で、森林生活をなせり、後十二年を経てヴィラタ王の朝に仕へ其親任を得、五皇子相計り平和の間に故國を回復せんとせしかどもならず、此に於て兩軍戈を取て其勝敗を決せんとす、五皇子の一人文武秀絶のアルジュナ、親屬と戈を交ゆるを欲せず、頗る躊躇す、此處に於てクリシユナ出で來り、王の柔弱を責め王の職は武士にして戦ふにあり、父のため國のため何んぞ一戦せざると、彼はかくして宗教哲學の深義を説きのべ、アルジュナは之に對して沈思哲學的の考察を運らせり、此間の思想を「ダイアログ」として發表せるもの、これを

『婆伽梵歌』の結構とするなり、

思ふに紀元二三世紀の交印度思想高潮に達し、一方に古色蒼然たる『吠陀』あれば一方には深遠なる六派哲學あり、彼處に苦空無常無我を教ふる佛教あれば此處に苦行の外道あり、紛々擾々思想界は混亂のきはみに達せり、打て一丸として之を統一するものあるにあらざれば、人皆其適從に苦しまん、時代先覺者の任はまさし、此處にあり、『薄伽梵歌』の一篇、代の折衷統合思想を代表し、瑜伽僧法、吠檀多の三派を骨子として、更に時一大思想を案出せる者なり、瑜伽派よりは冥想をとりたり、されど、そのが魔術的方面は取る所にあらざり、僧法派よりは神我自性及び其關係をとりたり、されど、その上に實在神を立てたり、き、吠檀多派よりは唯一絶待の實在の神をとりたり、されど、彼の如くに萬有の存在を極端に否定せざり、き、而して更に其上に他力信仰光明攝取の福音を示すに至ては、宗教上豈偉大なる價值を有するものにあらずや、見よ、後世此歌によ

りて、ブガバタスの一宗開かれしにあらずや、印度教の大學者、シャンカラ、アチャリも之に註釋を施せしにあらずや。

二、他力攝取の根原は實在にあり

世界にありては親の慈悲は最も深最も大にして清淨無垢なるものなるよ、慈悲ありて親あるにあらず、親ありて慈悲あるなり、他力攝取の大慈悲は偉大超絶の親を要すとは知らずや、我は唯の慈悲を感愛する能はず、親を知り親の慈悲を感愛するなり、嗚呼慈悲を唯に感せよと云ふは空を握るにも似たるかな、信仰に實在を要せずと云ふは水に文字をかくにも似たるかな、吾人は『薄伽梵歌』にありては、宗教の根底として實在を如何に思索し如何に渴仰せるかを見んと欲す。

『薄伽梵歌』に於けるクリシナはピシヌの化身なりと雖、彼れは最高獨一の實在なりけるよ、此の獨一の實在よりして萬有の境界は發展し來る、始めに不生不滅にして十方にわたりてあますなく三世に渡りてつ

さざる無量慧無量光の實在ありて動かざること睡れるごとくなりき、
 其中の「ブラクリター」(自性)は「サタマス」(善)と「ラージャス」(憂)と「ターマス」(憂)の三作用を具するなり、この三作用動搖し始めて自性此處に開發し大を生じ我慢を生じ十六見を生ずるなり、精神的實在は化して物質的境界となり來るなり、嗚呼彼神歌の作者は宇宙萬有の本源として實在の神をみとめたり、神は在り而して迷妄の諸現象は如何にして存在せるものぞや、彼此處に於て諸現象の依て來る所を神の「ブラクリター」に歸せざるを得ざりしなり、「ブラクリター」は其作用として喜憂闇を具せり、彼は心的に世界の發展を觀察せり。

自性の支配により其等の意志によらず、自性の力により此の存在の全體を反覆生出せり。(第九章)

自性は監督者なく余によりて動くものと動かざるものを生せりかゝる道理によりて、「オー」クンチャーの子よ、世界は開展せり。(同)

喜憂暗の此の性質は自性より生まる、オー大なる權力の汝よ、自體に不滅の精神を束縛す、かくて喜は汚穢なき結果に於て苦痛を照し且つ脱却す、オー無罪の人よ、歡喜と智識の紐を以て、この精神を束縛す、憂は愛に溺れさせらるゝことによりて成立するを知れ、貪欲と執著より生せり、「オー」クンチャーの子よ、活動の紐を以て自身を束縛す、暗は愚癡より生れたるを知るを要す、愚癡は一切自身を迷はず、オー「バラタ」の子孫よ、そは不注意怠惰睡眠を以て自身を束縛す。(十四章)

吾人は既に物質原因たる神の「ブラクリター」を見たり、然らば更に進んで神の何物たるかを討究せん、試に思へ、宇宙法界を心的に觀察せる彼は、自心を觀するの眼を以て宇宙法界を見たるなり、我心は盡きざる泉にも以て妄想妄境界間斷あるなし、されど我心如何に煩惱妄想さかんなるにもせよ、心性の靈妙尊嚴にして犯すべからざるものありて存すること疑ふ能はず、「ブラクリター」の三徳動搖して妄想妄境界流出し

來るも、そが本源たる神我實在に至ては十方に渡り三世を貫き靈妙の至體たること疑ふ能はざるなり、『薄伽梵歌』の神は僧佉派の神我と云ふべきよりも吠檀多派の絶待獨一の神と云ふべきなり。

叡智、智識、妄想よりの自由、寛恕、眞實、感覺の抑制、平靜、愉快、誕生、死、恐怖、安全、无害、平等、満足、懺悔、能力、光榮、耻辱、有情の是等種々の性情は唯だ余より生ずるなり。(十章)

余は一切存在の始なり中なり終なり。(十章)

余は全世界の生産育者なり亦破壊なり。(七章)

梵は最上者なり不可壊者なり、そが顯現を「アデヤトマ」と呼ばはる。(八章)

不可説、不可壊、遍一切處にして不可知、不可思議、平等、不動なるものを思念せよ。(十二章)

太陽も照さず月も火も照さざる所は、人此處に到達すれば再び還ら

ず、是れ余の最上往處なり。(十五章)

余は全宇宙の原因なり。(七章)

余は此の宇宙の父なり母なり創造者なり祖先なり知らるべき物なり神聖の中心なり云々。(九章)

余は不滅なり亦死なり、「オ」アルジニナよ、余は有なり又有ならず。(同)

之を要するに神は材料原因なると共に活動原因なり、萬物の創造者維持者たると共に破壊者なり、遍一切處なると共に過境的實在なり、主觀なると共に客觀なり、吾人は此の神に對して如何なる關係を有すべきものなるか、吾人は喜憂闢三徳動搖の結果生出し來りしものなり、されば常に忘想を起し忘境界に束縛せられ、造業起罪、此處に死し彼處に生れ輪廻轉生暫くたも止まず、されど一度回顧反直して神を知るの智識を得、寂靜所にありて常に神を冥想し、至誠心を以て神を信仰せんか、我は此處に神と一致し神の方にて涅槃に入を得べけんかし、嗚呼薄伽

梵歌』の世界観は遂に宗教の安心を得んがための道程なりしなり。世界は單に智識よりみれば眞の世界なり、善悪なく美醜なく優劣なくあるものは唯た眞なり、されど生々激測たる吾人の活精神より見たる世界は價值の世界なり、至深なる活精神の要求は世界を神とするなり、神は價值の最上なり、神は主觀的内在的妥當性を有すると同時に客觀的妥當性を有するなり、主觀的妥當と云ふ中に客觀的妥當を有せるなりと知らずや、客觀的妥當なくして主觀的妥當のみあり得べきにあらざるなり、要求原理にして既に要求を満足せんか、これ實在原理なり、薄伽梵歌の實在觀、世界縁起觀、自心の性情發展を以て宇宙に附與し、價值の要求を以て實在に附與せるなり、此處の見地に立て、『薄伽梵歌』をみんか、甚深の興趣は湧いて止まざらん、我は些々たる教義の是非は今此處に論せず、そが實在觀に至ては人心の要求、宗教の本質にして、世界の存するきはみ人類のあらん限り、長へに滅却せざるを信するものなり、光

明攝取他力信仰また此處に淵源するにあらずや。

三、宗教の精髓

鑛山悉く燦然たる金にあらず、深く地層を穿ち岩石を淘汰し、種々の手段を以て漸くとり得たるものこれ金なり、『薄伽梵歌』はそれ鑛山の如きか、これが宗教の精髓を獲得せんとせば、冗長にして空遠なる印度思想の中を辿り行ざるべからず、不用なる僧伽瑜伽吠檀多のある教義を淘汰せざるべからず、有害なる印度當時の儀式習慣を棄てざるべからず、かくして暫く探り得たるは、『薄伽梵歌』の宗教的生命なり、此生命や、『薄伽梵歌』の生命なり、同時に一切諸宗教の生命なり、紀元二三世紀の印度の生命なり、共に一切時一切處の生命なり、決して輕々に看過し去るを許さざるなり。

一、智識冥想、人心深奥の要求として最高至妙の實在あり、こは宗教の本質として一切宗教に貫通せるものなり、『薄伽梵歌』に於て固より然り、如

何に此實在に到達すべきやとは尤も重且つ要なる問題に屬す「薄伽梵歌」は之に答へて第一にあぐるものは智識なり第二にあぐるものは冥想なり智識とは何ぞ冥想とは何ぞ

智識は無明に覆はれたり故に凡ての有情は迷惑しぬ自身智識を以て無明を破壊する人々は智識は太陽の如く最上實在を示すよ(五章) オールジュナよ能く燃たる火は薪材を灰と化する如く智識の火は諸業を灰に化するなり(四章)

人我を崇拜し我を冥想し其他何物おも崇拜冥想せず常に歸敬せんか余は新才智を興へ其等によりて得らるゝ所のものを保存するなり(九章)

常に歸敬し最高信仰を有する人々は決定心を以て餘を崇拜せよ我之を歸敬の至れるものと考ふ感覺の全部を抑制し一切時に於て一心平靜にして不可説不可壞遍一切にして不可知不可思議无差別不

動永久なるものを冥想せよ(十二章)

實在に到達せんとするには先づ實在の何物たるを知るの智識を要するなり智識は人に於ける眼なり眼に依て萬象明に行くべき方向決定するなり我等は無明に依て眼を覆はれたり故に行くべき道を誤り業を作り苦界を出るに由なかりき今や智識の眼は開けたり行くべき道は明なり妄業は作らんと欲するも作り得ざるなり財産地位人類の眼にあらず學術文藝人類の眼にあらず實在をみとむる智識これ人類の眼なりけり此の智識なきを稱して醉生夢死の人と云ふべけれ冥想は静寂の閑所にありて實在を冥想し實在と心的交通をなすなりされど薄伽梵歌の冥想は廣くして如何なる時如何なる事をなすも實在を念じて之を爲さんかこれ冥想たるなり嗚呼冥想は神と交る唯一の通路なり

二、信仰信仰固より智識冥想に離れたるものにあらず信仰あればこそ

智識冥想あるなれ、智識冥想あるは信仰の存在する所以なり、されど『薄伽梵歌』に在ては、信仰は通常諸宗教に云ふ意味より深き意味を有せり、即ち信仰は他力攝取を示すものなり、實在の大慈悲救済を示すものなり、これ宗教の極致を示すものならずんばあらざるなり。

我を念せよ、我に生命を捧げよ、互に教へ我を語れ、彼等は常に満足又幸福なり、斯く常に歸敬し愛を以て歸敬する人に、我は彼等が我に到達すべき智識を與へん、而して彼等の心に住し、智識のかゝやける光を以て、彼等の情より出てたる愚癡の暗黒を破壊せん、(十章)

汝の精神を決定し、而して我を理解せん、汝は我に來るべし、此處に一の疑義を容れず、オ「ブ」リ「タ」の子よ、最上實在神と考ふる人、一心決定他に走らず、繼續して冥想状態の疑思を保持する人は、彼に行く

(八章)

眞實の惡人我を崇拜し、他に崇拜せざりしならん、彼は慥に善と考へられん、如何となれば、彼は能く決定せるが故なり、(九章)

常に歸敬し、最高の信心を有し、決定心を以て我を拜する人は、我は歸敬の尤も至れるものと考ふ、(十二章)

オ「ブ」ハ「ラ」の兒よ、汝全心を傾け、彼の中に避難所を求めよ、彼の慈悲によりて、汝は最上の綱、永遠の居所を得ん、(十八章)

此世界に於て、歸敬者は、功罪二つながら棄つべし、(二章)

『薄伽梵歌』の冥想と云ひ、信仰と云ふは、主觀内察の一方のみにあらずし、て、明に客觀の對象に對して之を發起するものなり、而して其信仰、其冥想は、一心一向、最高のクリシュナに向けるべきものにして、決して余神、全物に二心あるを許さず、惡人と雖も心を一にして、彼を信念せば、彼は信仰により善とせられ、解脱を得べし、思ふに、宗教の究竟的要義は、大智、大悲の至靈の力あり、无智は無智ながら、惡人は惡ながら、信仰に依て救済せらるべし、て、ふ一點にあり、是れ世の所謂、智力的、宗教道義的、宗教

功利的宗教の到達し能はざる宗教の最高頂点なり「薄伽梵歌」此處に到達せるは豈に快哉ならずと云はんやこれ豈に宛然他力真宗の教義にあらずや

三、結果を見ざる活動我にして既に最高の地位に到達せんか求むべき結果なきなり我が爲す所一として高尚尊嚴ならざるなきなり又其中に大小優劣なし時處諸縁に應じて神の事業をなすのみ神を知り神を信する人にとりては一切の事業神の事業にして自己の結果を求めざるの活動なり結果を求めざるの活動豈に偉大尊嚴にあらずや

オ「ダナ・ンガヤ」よ歸敬により行動をなせ執着を棄て成功不成功平等にあれかゝる平等を歸敬と云ふ(三章)

犠牲報償懺悔の行動を棄てざるべし彼等は爲されざるべかるざるものなり犠牲報償懺悔は聖賢に對する神聖の手段なりオ「ブリタ」の子よ此の行動にして執着と結果を棄てゝなすべきを要すこれ

余の秀絶せる決定せる意見なり(十八章)

利己主義の感情を有せず汚辱の精神を有せざる人は凡て此人民を殺すと雖殺さざるなり行動に依て束縛せられざるなり(同)

智識及び經驗を以て満足せる歸敬者は其人は不動なり其人は感覺を制止せり其人は石炭石黄金は同一なり之を歸敬されたりと云ふ最高者に歸敬せし人は良希望者朋友敵を平等に考ふ其人は無差別なり兩面を部分とす其人は憎悪者親密者善惡の對象なり(六章)

世に敵あり味方あり善あり惡ありされど我の之に對するや利己心を棄て結果を求むる心を棄て神の業としてなすべきを行ふ豈に偉大神聖ならずや世に石あり黄金あり美あり醜ありされど我の之に對するや執着なく偏頗なく共に平等の價値あり豈に神聖ならずや

四、世間と出世間は一なり「薄伽梵歌」に在ては世間と出世間は一なり飯敬者は唯だ神の業として一切をなすべきのみ此間に二者の區別を設

くる必要なきなり、喜憂闇の三徳に束縛せられ、種々の妄想を起し、妄境界を作ると雖、一度神を知りて之に歸敬せば、一切神ならざるなく一切の事業神の爲ならざるなし、何んぞ世と出世とを問はんや、現世と未來とを問はんや、これ『薄伽梵歌』の絶待迷妄論にあらずして汎神論たる所以なり。

汝何事を爲すとも、何物を食ふにも、何等を貧人に與ふとも、如何なるものを供物になすとも、又如何なる懺悔をなすとも、そは總て予が爲めになせ、オーアルジュナよ。(九章)

五階級の打破『薄伽梵歌』は所々に印度社會の四姓の階級を嚴守すべきを教へたり、されど平等宗教の歸する所、宗教問題につきては平等を唱へざるを得ざるなりき、これ社會の風習如何なりしにせよ、宗教としては遂に此處に到達せずんば止む能はざるなり。

其故は、オーブリターの子よ、罪惡の中に生るるも、婦人、毘舍、首陀羅も

同一に余に歸依して、最高目的に到達せん。(九章)

『薄伽梵歌』に無用の論議なしと云はず、棄却すべき事實なしと云はず、されど上叙の教義の如きは永遠に朽さる宗教の大真髓にあらずや。

四 馬鳴の『起信論』と『薄伽梵歌』

『起信論』の教義、之を評叙するの暇なし、唯だそれ要をとりて一言せん、一心に二種の方面あり、一は眞如一は生滅なり、生滅門の現象千種万狀なりと雖、眞如の靈妙依然としてもとの如し、眞如は一法界總相の體なり、眞實識知なり、光明なり、余は無明生滅に依て生死に流轉すと雖も、一度實の如く眞如を知り得んか、妄雲長く滅して最高實在に到達するを得べけん、愚者无力者、大智眼の開く能はずんば、彌陀の他力によりて救済を求むべしと、これ豈其教義に於て其大精神に於て『起信論』と『薄伽梵歌』姉妹の如く兄弟の如くなるにあらずや、乞ふ二三の類文をあげん、
相大とは謂く如來藏なり、无量の性功德を具するが故(起信論)

大梵は余の藏なり、余はそれに種子を注ぐ、オー「バラター」の子孫よ、一切のものそれより生出す。(十四章)

所謂不生不滅生滅の和合して一にあらず異に非ず。(起信論)

余は不滅なり又死なり、オー「アルジュナ」よ、余はある所のものなり又あらぬ所のものなり。(十章)

自然に不思議の業種々の用あり、即ち真如と等く、一切處に徧す、又亦用相の得べきことあるなし。(起信論)

彼は人々の中に賢なり、皈敬を有せり、其人は行動に於て非行動をみ、非行動に於て行動をみる、行動の凡の結果の執着をすて、常に満足して何物にも屬せず、彼は行動に關すと雖凡に於て何をもなさざるなり(四章)

當に知るべし、如來勝方便あり、信心を攝護す謂く意を專にし佛を念する因縁を以て、願に隨て他方の佛土に生ずるを得て、常に佛を見て

永く惡道をはなる。(起信論)

此自體をすつる所の彼は、最後の瞬間に余を念じ此世界より出發し、余の本質に來る、此處に一の疑あらず、故に一切時に於て我を念せよ、汝の意を決定し余を知るならば、汝は余に來るべし、此處に一の疑あらざるなり(八章)

其他類文を求めば疊々盡さざるものあらん、思ふに「婆伽梵歌」と「起信論」の間、一條の精神貫通せるものありて存す、これ故なくして然るものならんや。

他力宗教論終

明治三十七年四月十五日印刷
明治三十七年四月十八日發行

他力宗教論奥付
正價金三十五錢

著者 楠 龍 造

發行者 清水 金右衛門
東京市本郷四丁目五番地

印刷者 中 村 彌 助
東京市京橋區日吉町十番地

印刷所 近 藤 商店
東京市京橋區日吉町十番地



發兌元

東京市本郷四丁目
電話下谷三〇三九

文 明 堂

賣捌所 興教書院 法藏館 森江書店

曉島敏氏著

●吾人の宗教 定價貳拾五錢 郵稅四錢

佐々木月樵氏著

●實驗の宗教 定價五拾五錢 郵稅拾錢

濱口惠璋氏著述

●青年の宗教 定價參拾錢 郵稅四錢

清澤滿之氏、多田鼎氏、佐々木月樵氏、曉島敏氏合著

●佛教の信仰 定價參拾錢 郵稅四錢

文學士近角常觀氏著

●信仰の餘瀝 定價拾五錢 郵稅貳錢

濱口惠璋氏著

●心靈上の修養 定價四拾錢 郵稅四錢

清澤滿之氏著

●修養時感 定價五拾錢 郵稅六錢

加藤咄堂著

●修養清話 定價貳拾五錢 郵稅四錢

南條井上村上三博士自傳

●三博士佛教講演集 定價參拾錢 郵稅四錢

老海名暉正氏編

●耶穌基督傳 七製六拾五錢 郵稅拾錢 並製五拾五錢 郵稅八錢

老海名暉正氏著

●基督の大訓註釋 上製六拾錢 郵稅拾錢 並製四拾五錢 郵稅八錢

露國トレストイ伯著 日本加藤直士譯

●我宗教 定價七拾五錢 郵稅拾錢

文學博士井上哲次郎氏著

●釋迦牟尼傳 上製八拾錢 郵稅拾貳錢 並製六拾錢 郵稅八錢

文學博士松本文三郎氏著

●佛教史論 上製八拾錢 郵稅拾貳錢 第一編 並製六拾錢 郵稅八錢

文學博士前田慧雲氏著

●大乘佛教史論 上製九拾錢 郵稅拾五錢 並製七拾錢 郵稅拾錢

舟橋水哉氏著

●小乘佛教史論 定價五拾五錢 郵稅八錢

清水清明氏編

●哲學館倫理問題 定價貳拾五錢 郵稅四錢

中島徳藏氏 曾像清水清明氏編

●哲學館倫理問題續篇 定價參五錢 郵稅六錢

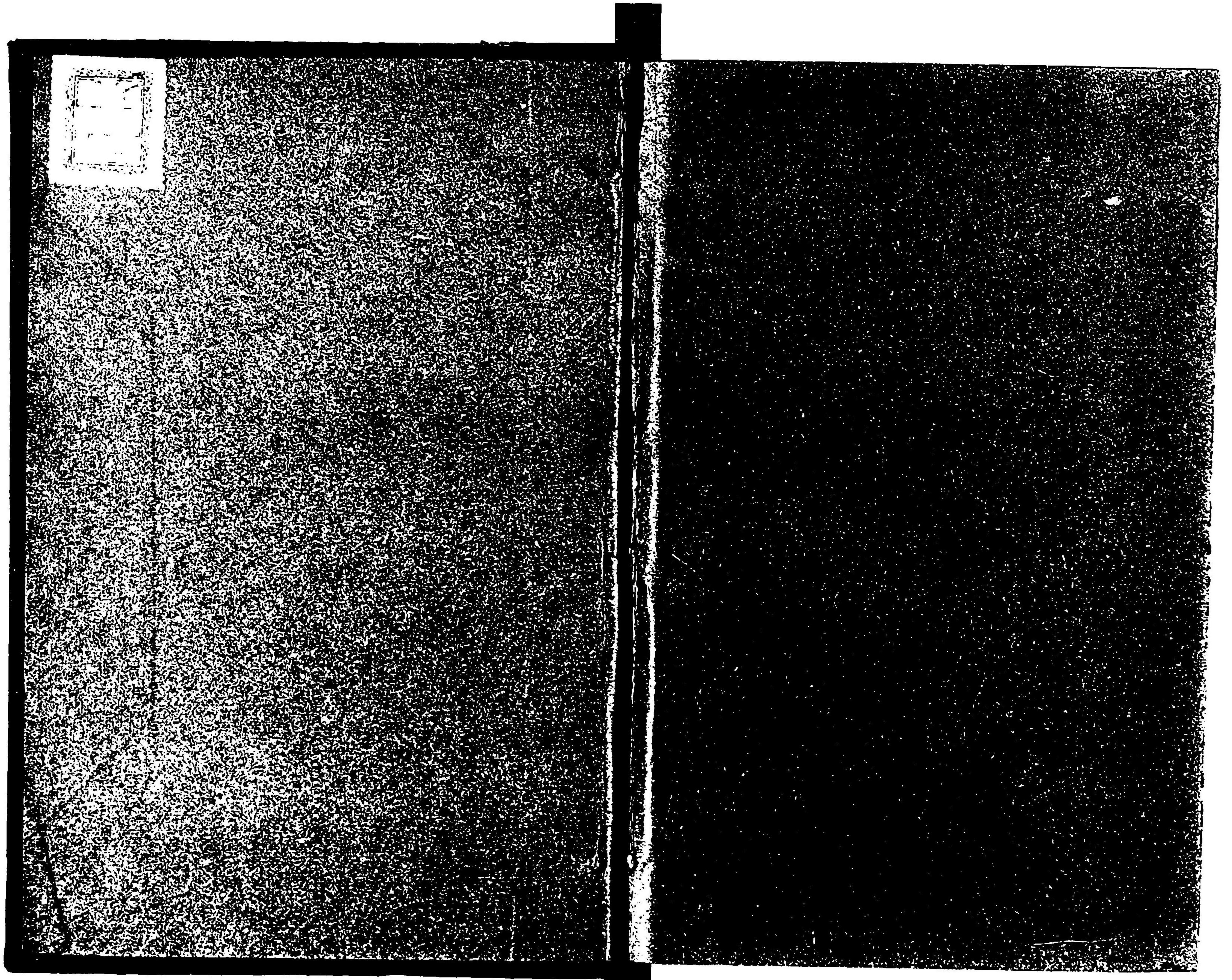
發行所

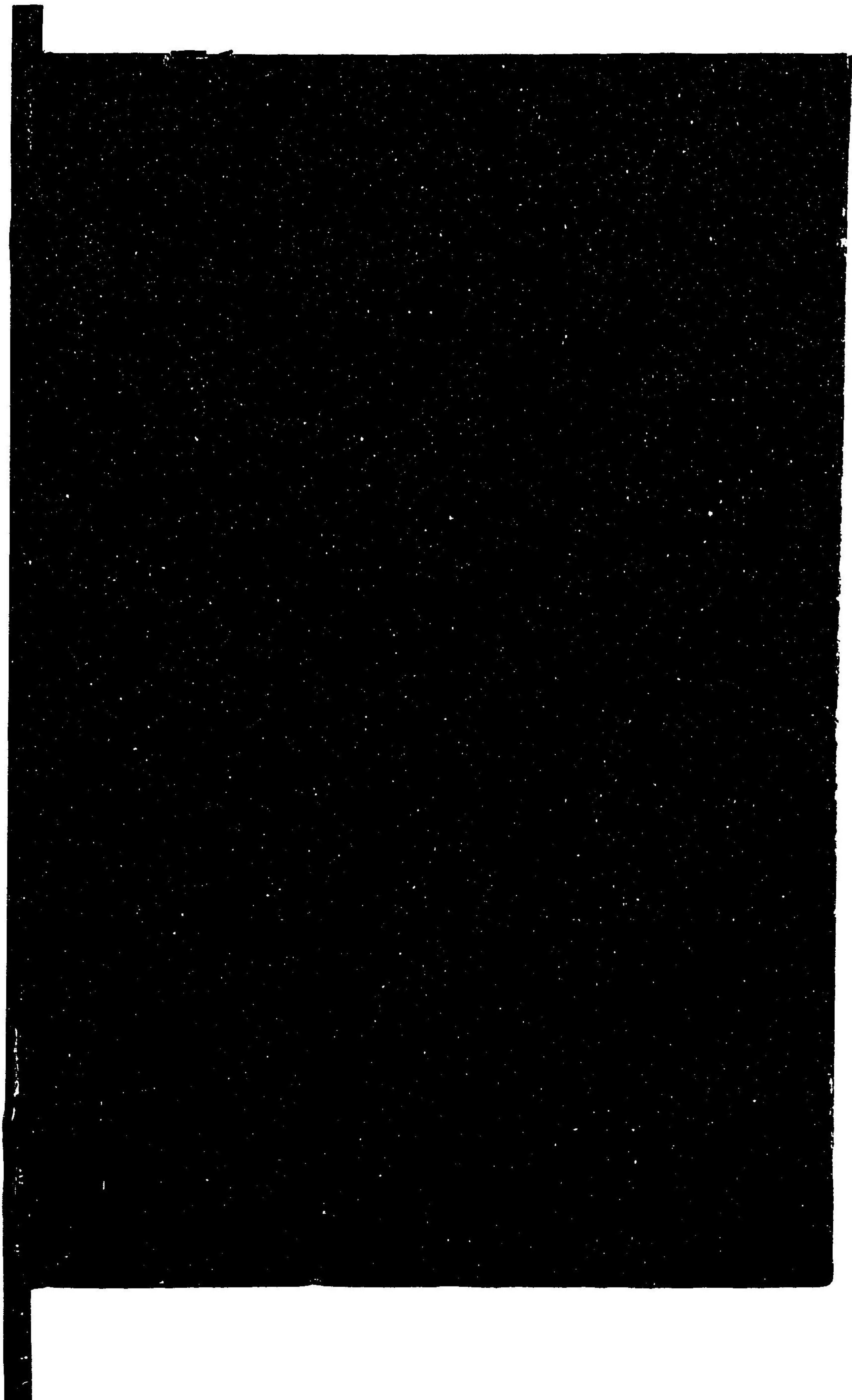
東京市本郷 四丁目五番地

文明堂

318

134





018833-000-5

318-134

他力宗教論

楠 龍造/著

M37.4

ABF-2295

